

インド留学記

その10

二度目のインド 国内旅行 (1)



学授岩
大 沢 教
金助島

半月三百ルピーの旅へ

インドでの留学生活も半年が過ぎた。またぞろ旅の虫が騒ぎ始めた。サンスクリット語を読むばかりの生活に、そろそろ嫌気がさしてきたのだ。ちょうどそのころひさかたぶりに、日本の義理の妹から便りがあった。新婚旅行でインドに来ると言うのだ。それ幸いと会いに行くこ

とに決めた。落ち合うところはベナレスだ。そのついでに（どっちがいつでなのか分からないが）、半月ほどベナレス近辺を旅することにした。プーナを出て、ボンベイ近郊のダダルで汽車を乗り継ぎ、まずカジュラーホーへ。そこからベナレスを経て、ブツダ・ガヤー（お釈迦さんが悟りを開かれたところ）などの仏跡を巡り、再びベナレスに戻ったのち、プーナへ帰ってこ



インド全図およびその周辺地図

ようという計画だ。

「なにしろ今度は二度目の旅行だ。それにインドに来て半年もたっている。インド人にもインドの生活にも相当なれた(はずだ)。最初の旅行とはひとあじ違った旅をしたい。できるだけインド人の旅に近い旅を試みたい。最初の旅は、すべて一等車で、ホテルはほとんどみんなバスとトイレ付きのところだった。それに日本へのおみやげにレモン・トパーズなんかも買ってしまった。そのせいで半月の旅行に八百ルピー(当時約二万五千円程度)もかかってしまった。八百ルピーといえば、大学の助教教授のほぼひと月の給料じゃないか。インドに住んでいてそんな豪華な旅行をしてはいけない。インドに住んでいる意味がない。せめて大学院生のひと月の奨学金でいどで、半月くらいは旅行できなくっちゃ駄目だ。よし今度は、旅費・宿泊費すべて込みで三百ルピー(約一万円)でやっ

てみよう」。こう考えて、きっかり三百ルピーだけ握りしめ、リュックをかついで旅にでた。

三月五日の夜、九時五〇分発、ボンベイ行きの鈍行に乗る。当然二等車だ。途中ダダルで乗り換えてベナレスまで、料金は外国人学生割引でなんと三ールピー(約千円)。これでベナレスまで約千五百キロ、ほぼ一昼夜まるまる汽車に乗っていていいのだ。三時ごろダダルに着く。乗り継ぎのベナレス行き列車は、六時五〇分発だ。しばらく駅の待合い室で待つことにする。リュックには寝袋と着替えしか入っていないのだが、それでも盗難がこわくて朝まで眠れない。うっすらと東の空が明るくなりかけたころ、駅のホームで紅茶を飲む。ひんやりと冷たい空気のおかげで飲む。ミルクと砂糖のたっぷり入った紅茶。生き返ったような気分だ。すると腹がへってきた。ホームにいる物売りからプーリー(インド式揚げパン)とバージー(野菜のてんぷら

を買い、二杯目の紅茶といっしょに食べる。これが今日の朝食だ。

六時ごろ、ダダル発ベナレス行きの列車がホームに入る。ポーターの男の子には、前もつて二ルピー（六〇円）渡しておいた。それで彼が席を確保してくれると言うのだ。半信半疑だったが、とにかく信用してその子を待つ。すぐに得意気な顔で彼が戻って来た。手を引くようにして席へと案内してくれる。二等車の車内に入ると、座席は日本の汽車のB寝台のような作りになっている。座席は上下とも木製だ。下の席はちゃんとした座席になっている。だが上の席は、すのこのようになっていて。そしてそこにはたいてい荷物が置いてある。どうも網棚のようだ。そのうちの一つに男の子が一人座って手を招きしている。ポーターの友達のようにだ。あたりを見回すと、あいた席などすでない。通路で寝て行くよりはずっとましかと思つて、その

席（というか網棚）に陣取る。寝袋を引いて寝そべってみる。なかなか快適。とにかく体をのばして横になれるのがいい。リュックを枕がわりに寝転がっていると、昨夜の徹夜がきいたのだろうか。お金と荷物の心配はどこへやら、知らぬまに寝入ってしまった。

カジユラーホーのミトウナ像

一等車で旅したときには、ボーイが車室に食事の注文をとりに来た。そして注文しておけば、食事にターリー（インドの定食）を運んで来てくれた。だが二等車ではそうはいかない。お腹がすけば、どこからともなく車内にあらわれた物売りから、バナナ、キュウリ、ピーナツなどを買って食べるか、途中の停車駅のホームでプリーとかバージーなどを買って食べるしかない。うとうととしては目をさまし、またうとうととしては目をさまし、お腹がすくと適

当に食べ物を買って食べながら、ようやく翌日（三月七日）の朝六時三〇分にサトナーに着いた。ここからカジュラーホーまでは一一七キロ。駅前で六時四五分発のバスに乗り込み、カジュラーホーへ。料金は五ルピー五〇パイサ（一六五円）だ。カジュラーホーには一〇時二〇分に到着。バスの中で一緒になった日本人男性旅行者三人（二人組の大学生と一人旅の大学生）とともに、まず宿探した。四人相部屋で一人一泊四ルピー（一一〇円）の安宿（Gupta Hotel）に泊まることにする。

四人がそれぞれ貸自転車（一日五〇パイサ＝一五円）を借り、まず西群の寺院群に向かう。そして寺院群の奥にあるヒンドゥー教寺院デーヴィー・ジャガダンパーに到着。この寺院に、エロティックなことと有名なあの男女交合像（ミトウナ像）が、一番たくさんあるのだ。ある。ある。寺院の外壁は無数のミトウナ像でま

さに埋めつくされていた。男女の像が本当にいろんな体位でからみあっている。四八手なんてものじゃない。レズあり獣姦ありの世界だ。こんなものがお寺の外壁に彫られているなんて、いったい何を考えているんだろう。確かに一見そんなふうに見える代物だ。だが、インドの乾いた空気のなか、照りつける太陽のもとで、まじまじと見ていると、まったくいやらしい気がしない。あまりにあげつろげに「堂々と」という感じなので、セックスにはつきものと思ひこんでいた、秘め事的な淫びさが感じられないのだ。性を謳歌するということがあってもいいんじゃないか。むしろそんな気持ちにさせる代物だった。

これらの寺院群が作られたのは、今から約千年ほどまえのことだ。そのころこの地には密教が栄えていた。密教の教えでは、女性が神の力の現れたと考えられていた。だから女性との性

交は、神の力に接するためのものだったのだ。

一般にはこんな説明がされている。確かにこの説明のように、寺院にこんな像が彫られたのは、密教の影響があるのだろうか。だが像を見ているうちに、私は次のようなことを考えていた。

インドのヒンドゥー教徒の人生の目的は、四つあると昔から言われている。すなわち、実利（アルタ）と愛欲（カーマ）と法（ダルマ）と解脱（モークシャ）である。インドという日本では、貧しい遅れた国とか、宗教的な神秘の国というイメージが強い。そのため、時代遅れの身分制度カーストの社会的規範（ダルマ）を守って生活する人とか、解脱を求めて出家して修行するヨーガ行者というような生き方を、すぐ思い浮かべてしまうようなところがある。だが、お金儲けをすること（アルタ）やセックスを楽しむこと（カーマ）だって、堂々と人生の四大目的のなかに含まれているのだ。その意味

では、私たち日本人が、「金儲けやセックスが人生の目的です」とは、本音ではたとえそう思っていたとしても、儒教的あるいは仏教的禁欲主義のせいかな、そう堂々とは言い切れないのとは違っている。確かにインドは、今では、映画にキスシーンすら長年登場しなかったという国柄だ。だが昔は、セックスの経典『カーマ・スートラ』を生み出した国なのだから、このミトゥナ像に描かれているように、今よりもっと自由にもっと多様にもっと堂々とセックスを楽しむ人たちがおり、またそうしたことにもっと寛容な土壌があったのではなかったか。そしてそのような土壌の上に、密教の影響も受けて、このようなミトゥナ像が壁を埋めつくすような寺院が作られたのではなかったらうか。

カジュラーホーの夜

西群の諸寺院のミトゥナ像を見て、性に対し



てなんだかとてもおおらかな気持ちになって、宿に戻ると、そこに一人の日本人女性旅行者がいた。女性のインド一人旅なんて珍しいなと思しながら、こちらは四人という気安さもあって気軽に声をかけ、一緒に昼飯を食うことになった。話してみると、名古屋の私立A大学の学生だとのことだった。インドに来る前、名古屋で私が下宿していたのは、そのA大学のすぐそばだった。懐かしさも手伝って、とても話がはずんだ。それに五人ともみんな大学生で、インドをヒッピーみたいに旅しているという気楽さというか親しみもあって、その日はみんな相部屋で泊まることになった。

昼食後、自転車で東群と南群の諸寺院を回り、夕方また宿に戻る。晩飯まではまだ間があるので、みんなで少し散歩することにする。ゴードル川の川辺に座り込んで話をする。そのうち後の三人は先に宿に戻り、彼女と二人川辺に残る。

インドの夕闇は赤くない。「夕焼けこやけで日が暮れて」という雰囲気とはちよつと違う。東の空が白々と明けてくると言うときの、「白々」に近いのだ。変な言い方だけど、白い夕闇にやさしくつまれるという感じだ。その白い夕闇が黒い夕闇へと移りゆく中、僕たちは、今日会ったばかりだということが自分でも信じられないくらい、とつても打ち解けあって、いろんなことを話した。そしてこれ以上話していると、暗くてもう帰り道が分からなくなってしまうくらいになって、やつと宿に戻ってきた。

夕食は五人で酒盛りだ。インド製の甘いラム酒を飲みながら、インド体験談が始まる。圧巻は京都の私立B大六回生の体験だった。なんと彼は、日本から船に自転車を積み込んでカルカッタに渡り、カルカッタからベナレスまで自転車をこいでやってきたというのだ。今は自転車をベナレスの宿にあずけて、ここには汽車とバ

スを乗り継いで来たのだそうだ。これからまたベナレスに戻り、そこから再び自転車で、デリ、ボンベイを回り、金が尽きればボンベイから、そしてまだ金が残れば西アジアのほうにも足をのびして、また船で日本に帰るといった。そういう旅の仕方もあったのかと、そのたくましさに感激してみんなで盛り上がり、ラム酒がどんどんすすむ。

そのうち、二人組の大学生のほうは、酔っぱらって先にベッドへ。残った三人でさらに飲みながら話はずむ。自転車旅行の御仁が、ときおり手巻きのタバコを吸っている。ハッシンシ（大麻）かなにかだったのかもしれない。彼の腰が突然ぬけてしまう。彼は這ってベッドへ。最後に彼女と二人残される。二人でさらに飲みつづける。しかしそろそろ限界だ。酒と話はこれくらいにして寝ることにする。

入り口から順に、すでに三つのベッドが占領

されていた。あいているのは奥のベッド二つだ。彼女は一番奥のベッドに、僕はその隣のベッドに入る。カジュラーホーのミトウナ像のせい、酒のせい、はたまた彼女が隣のベッドにいるせいなのか、なかなか寝つかれない。

そのうちとうとうとして、ふと目をさまし、隣を見る。彼女の手がベッドから外に出て、こちらがわにたれている。その手が僕に向かつてさしのべられているように見えた。思い切つて握ってみる。すると彼女がスリと僕のベッドに入ってきた……。そしてまたスリと自分のベッドに戻っていった。

男女がおおらかに性を謳歌するミトウナ像に心動かされたせいだろうか。こんな夢を見て朝目覚めると、彼女は九時四五分の飛行機でベナレスへたつとかで、早々と朝食をすませ、身支度をしている。そのまま彼女とは、お互い名前も告げずに別れた。